パスカルの《アポロジー》のプラン復元に関して（Ⅷ）

竹　下　春　日

I　各章の順序決定のための準備

（一）　本論文の意図は，パスカルの≪アポロジー≫を構成すべき各≪章≫chapitre——具体的には各リヤス liasse——の順序を推測決定することにある。『第一写本』に記されている各章の順序は，果してパスカルが真実企図したものであろうか。この疑問は，正当なる根拠を有つ。この『第一写本』の順序を通覧考察する時，11°≪A. P. R.≫ないし 12°≪始まり≫ Commencement（番号附けは Lafuma による）以降が≪アポロジー≫の第二部と考えられるにもかかわらず，10°≪至福≫Le souverain Bienは第一部に置かれている。これは不合理である。なぜなら，パスカルはこの章（10°）所属の La. 300-Br. 425 の冒頭に≪第二部≫Seconde partie と，明らかに記しているからである。したがってわれわれは，『第一写本』における各章の順序（したがってリヤスの順序）を疑うべき権利を有つのであり，爾後われわれは方法的懐疑を，『第一写本』の順序全体に適用し，われわれ自身の推論によってのみ，各章の順序を決定することにしたい。

（二）　次にわれわれが述べるべきことは，各章の順序決定の主要方法である。われわれは，≪アポロジー≫を構成すべき重要事項（パスカルより見た重要なる概念・思想・叙述を指す）の一つが共通に見出される二個の章（Classé）があるとすれば，この両章を内容上密接な連関があるものとして見做し，爾余の要素（例えば両者の論理的必然関係，パスカルの指示，≪gradation≫等）を考

慮して，その前後関係を決定することにする。

かかる方法の妥当性ないし有効性は，すでに拙論VI回において示されている（IIIの三の a, b)。即ちわれわれは，10°≪最高善≫中の La. 300-Br. 425 と Non classé の La. 301-Br. 426 との内容的連関を把捉し，さらに La. 301 と 15° bis≪本性の堕落≫との繋がりを発見し，これによって La. 300 と 15° bis との必然的関係を推定した。この際 La. 300 は 10° 中に綴られているから，10° と 15° bis とは連関を有するものとなり，而して 15° bis は≪第二部≫に所属するものであるから，10° もまた≪第二部≫中に所属するはずであることを，結論したのである[1]。この結論は，パスカル自身の附与した小見出しによって実証された。なぜなら，10° 中の La. 300 の冒頭には，明らかに≪第二部≫と記されているからである。それゆえ，われわれの方法による推定は，La. 300 の小見出しが仮りに無かったとしても，実際上は正しかったと，言いうるのである。

最後にわれわれは，章順序の決定に当って，Classé の諸断章を手掛りとするが，これらが Non classé をも含むパスカルの≪アポロジー≫のプラン復元に利用しうることは，すでに前回（VII）において，証明済みであることを，附言しておきたい。

II　各章の順序決定の作業

（一）　11°≪A. P. R.≫と 12°≪始め≫について——11° の La. 309-Br. 430 には≪A. P. R. 始め≫という小見出しが附されている。この≪始め≫Commencement という語は，12° の≪Commencement≫と一致する。したがって両章は連関があり，接近した位置におかれていたものと推測される。この二個の章の連関を，便宜上等符号で表現すれば（以下毎回同様），11°＝12° である。次に 12° 全体を概観した場合，その主旨をなすものは，≪不信仰者たち≫ impies についての（イ）現状分析と，（ロ）これに対する反省の催促，（ハ）次に彼らの真理探求とこれに即したキリスト教の神への関心の喚起，（ニ）最後に彼らに同情を持つべきこと，の四者である。この章（12°）に所属する各断章はすべて，この四項目の全部または一部を，その内容とするものである。一方，11°

のはこの四項目中の三つ（イ，ロ，ハ）を，その主要な内容としている。それゆえ，11° と 12° とは内容上緊密な連関があり，両者ともに狭義の≪アポロジー≫の≪始め≫として，極めて相応しいと言いうるものである。したがってこの点においても，11°＝12° である。

さて 11° の La. 309 中には，次の叙述が見られる――≪人間の偉大さと惨めさとはこんなにも明らかであるから，真の宗教はどうしてもわれわれに，人間のなかには何らかの偉大さの大きな原理が存在し，また惨めさの大きな原理が存在することを教えてくれなければならない。すなわち，真の宗教は，われわれに，これらの驚くべき対立を説明してくれなければならないのである。≫この断章中の≪人間の偉大と惨めさ≫les grandeurs et les misères de l'homme および驚くべき≪対立≫ contrariétés は，すでに≪第一部≫に 3°≪惨めさ≫Misère と 6°≪偉大さ≫Grandeur および 7°≪矛盾≫Contrariétés の三個の章が存する。こうして La. 309 すなわち 11° は，≪第一部≫の 3°, 6°, 7° と連関があり，これらを前提として，これらに接続していることが分る。殊に 7° の La. 237-Br. 416 は≪A. P. R. 偉大さと惨めさ≫という見出しを持っており，7° と 11° との密接な関係を示している（7°＝11°）。ところで≪Contrariétés≫（7°）とは，≪Misère≫(3°) と ≪Grandeur≫(6°) との矛盾（対立）のことであり，したがって 7° は 3° と 6° とを前提とすることによって，叙述上これらの後に来るものであると言いうる。この前後関係を矢印で表わし，(3°•6°)⟶7° と記号化することにする（⟶は，関係項の中間に，第三者（複数でありうる）たる別の章が介入しうるという約束で，この記号を用いる。以下毎回同様）。

今まで述べて来たところにより，11°＝12°;7°＝11°;(3°・6°)⟶7°。したがって (3°・6°)⟶7°＝11°＝12° となる。ところで 12°≪始め≫の諸断章（Classé）中には，人間の≪惨めさ≫や≪偉大さ≫，また両者の≪矛盾（対立）≫にかんする詳細なる記事は出ていない。すなわち，12° と (3°•6°•7°) とは，一応無関係ないし非連続的である（相対的意味において）。即ち 12°≠7°。それゆえ，もし 7°→12°→11° であるとすれば，(3°•6°•7°) と 11° の自然な連続性は，12° の介入で中断されてしまう。これは内容上また叙述上不自然である。したがって (3°•6°)→

7°→11°→12° でなければならない。かくしてわれわれは，Lafuma が準拠している『第一写本』の章順序の一部を，正しいものとして確認しえたのである。

（二） 11°≪A. P. R.≫と 15°≪人間を知ることから神への移行≫について

――（イ）11° の La. 309-Br. 430 中には，≪擬人法≫ prosopopée による神の言葉が掲げられている，≪……そして，これらの相反するものを調和させるためには，私は，私のうちにある神性のしるしを，説得力のある証拠によってあなたがたにはっきり見せようと思っているのである。≫この叙述中の≪神性のしるし≫にかんする≪説得力ある証拠≫ des preuves convaincantes とは，内容上≪成就した預言≫ prophéties avec l'accomplissement を意味している。なぜなら，La. 447-Br. 705 の見出しは，≪証拠――成就した預言≫とあり，また La. 664-Br. 713 中にも，次の見出しがあるからである――≪預言。神性の証拠。≫ Prophéties. Preuves de divinité. この際，≪成就した預言≫と≪神性の証拠≫とは，同じものである。なぜなら，これらはともに，旧約の預言の成就としての，神の子イエス・キリストの出現を意味しているからである。

ところで証拠としての成就した預言のことは，18° や 24° の中に出て来るが，既にこれより手前の章である 15°≪人間を知ることから神への移行≫中にも出ているのである。≪だが，キリスト教を見ると，そこには預言が存在する。≫（La. 389-Br. 693）が，即ちそれである。

（ロ） 次に La. 309（11°）中には，≪ここで，世界じゅうのあらゆる宗教を吟味して，キリスト教以外に果たしてこれらの点を満足させるものがあるかどうかを考えてみてほしい≫という叙述があるが，これに対応する言葉が，La. 389（15°）に見られる――≪私は多くの相反する宗教があるのを見る。ゆえに，一つのほかは，すべて偽りである。おのおの宗教はそれ自身の権威によって信仰を要求し，不信仰をおびやかす。だから，私はそれらを信じない。≫

以上（イ），（ロ）により，La. 309（11°）と La. 389（15°）が連関をもつこと，言いかえれば 11° と 15° とが結び附いていることが，結論される（11°＝15°）。ところで，前出の（一）により 11°→12° であり，12° は≪Commencement≫であって，これは≪第二部≫の≪始め≫に位置することを，示している。これに対し，15° の章名は≪人間を知ることから神への移行≫であり，この≪神へ

の移行≫ Transition……à Dieu とは，≪アポロジー≫の構成上かつまたタイトルの意味から言って，17°≪愛すべき宗教≫ Religion aimable へ一歩接近することである。したがって，15° は 12° と 17° の中間に位置することになる。すなわち，12°→15° となる。

（三） 9°・15°・15° bis・10° について——15° bis は≪本性の堕落≫というタイトルを有ち，15° のリヤス（断章綴）の末尾に綴られているが，これに書き込まれた分類断章は皆無である。しかし他のリヤスと比較するとき，体裁上一個のリヤスを構成するはずだったことは，明瞭である。事実 Lafuma が指摘するごとく[2]，この 15° bis に分類すべき Non classé の断章5個を見出すのである——La. 42-Br. 449, La. 130-Br. 441, La. 132-Br. 439, La. 145-Br. 448, La. 601-Br. 546。したがってわれわれは，これを独立の一章と見做すべきである。ところで 15° bis は 15° の末尾に綴られているのであるから，両者の順序は当然 15°→15° bis である[3]。

さて Non classé 中の一断章 La. 305-Br. 462 は≪真の善の探求≫Recherche du vrai bien という見出しをもつが，これは内容から言って，当然 10°≪至福≫（最高善）Le souverain Bien に属するものである。次にこの断章（La. 305）中には，≪哲学者たちは，すべてそれらのむさしさを示し，彼らの置きうる場所に善を置いた。≫という叙述が存する。したがってこの断章は，叙述中の≪哲学者たち≫philosophes を介して 9°≪哲学者たち≫の章に結びつく。この断章は 10° に所属すべきものであるから，必然的に 10° と 9° とは関連することになる（9°＝10°）。

ところで 10° の La. 300-Br. 425 には，次の言葉が見られる——≪神だけが，人間の真の善である。そして人間が神から離れて以来，自然のなかで，人間にとって神の代わりになれなかったものは何もなかったというのは，奇妙なことである。≫そしてこれに符合する叙述が，前出の 15° bis ≪本性の堕落≫ La nature est corrompue に分類さるべき断章 La. 301-Br. 426 中に見出される。15° bis に分類さるべきものというのは，この La. 301 が≪真の本性が失われたので……≫La vraie nature est perdue，と書き始められているからである——≪真の本性が失われたので，すべてのものが彼の本性になる。ちょうど，

真の善が失われたので，すべてのものが彼の真の善となるように。≫この文章の内容は，前出の La. 300 (10°) のそれと符合連関している。したがって La. 301 と La. 300, 言い換えれば 15° bis と 10° とはスムーズに繋がる (15° bis ＝10°)。

最後に，15°≪人間を知ることから神への移行≫中には，≪至福≫ le souverain bien ないし≪善≫ le bien なる語は出て来ない。それゆえ，15° と 10° とは表面上無関係である，すなわち 15° ≠ 10°。

以上を整理すると (1) 15°→15° bis。(2) 9°＝10°。(3) 15° bis＝10°; 15° ≠ 10°。15°→15° bis はパスカル自身の意図によるものであるから，動かし難い。したがって (1), (3) を綜合すると，15°→15° bis→10° であることが分る（ただし，これら全体と 9° との関連は未だ不明)。

(四) 10°・16°・9°・17°・18°・13° について——(イ) 10° と 16° について，まず第一に，16°≪他宗教の虚偽≫の中の La. 402-Br. 435 には，次の叙述が見出される，すなわち≪……キリスト教は，正しい人々に対しては，彼らを神性そのものにあずかるところまで引き上げるが，そのような崇高な状態においても，彼らはまだあらゆる腐敗の源を持っているのであって，そのために彼らは，生涯を通じて，誤り，惨めさ，死，罪に陥りうるものであるということを教える。≫この文における≪彼らはまだあらゆる腐敗の源を持っている≫ ils portent encore la source de toute la corruption という思想は，15° bis の≪本性の堕落≫ La nature est corrompue に由来するものであり，この章 (15° bis) を前提とするものである。したがって 15° bis→16° となる。ところで (三) により，すでに 15° bis→10° が確定されているから，10° と 16° の関連性が必然的に予想される，すなわち 10°＝16°。

次に 16° の諸断章は，キリスト教以外の諸宗教が≪人間的に成功する道≫ (La. 403-Br. 599) や≪天国≫ (La. 412-Br. 598) や≪外的なもの≫ (La. 413-Br. 251) に重きを置くことを説いているが，これはまさに 10° の≪……真の善を失って以来，人間にとって，あらゆるものが，何でも真の善として見なされるようになり，神と理性と自然とのすべにあんなにも反する自分自身の破壊に至るまでそうなった≫ (La. 300-Br. 425) ということに由来するのであ

る。したがってわれわれは，10°→16° を推定しうるのである。

（ロ） 10° と 18° について。18°≪宗教の基礎と反論への回答≫中の La. 433-Br. 523 は，次のごとくである——≪すべての信仰は，イエス・キリストとアダムとにおいて成り立ち，すべての道徳は邪欲と恩恵とにおいて成り立つ。≫この叙述内容は，既出の La. 300-Br. 425 (10°)——三および四のイ参照——と，その主旨を同じくしている，繁雑を厭わずこれを掲げれば次のごとくである。≪神だけが，人間の真の善である。そして人間が神から離れて以来，自然のなかで，人間にとって神の代わりになれなかったものは何もなかったというのは，奇妙なことである。天体，天，地，元素，植物，キャベツ，ねぎ，動物，昆虫，子牛，蛇，熱病，ペスト，戦争，飢饉，悪徳，姦淫，不倫などそれである。そして，真の善を失って以来，人間にとって，あらゆるものが，何でも真の善として見なされうるようになり，神と理性と自然とのすべてにあんなにも反する自分自身の破壊に至るまでそうなったのである。≫ (La. 300) この文中の≪人間が神から離れて……≫が La. 433 の≪アダム≫に，また≪人間にとって，あらゆるものが，何でも真の善として見なされうるようになり……≫が同じく La. 433 の≪邪欲≫に，さらに La. 433 の≪イエス・キリスト≫・≪恩恵≫が La. 300 の≪神≫・≪真の善≫に，それぞれ照応していることは，容易にわれわれの理解しうるところであろう。それゆえ La. 400 と La. 433 とを夫々含む両章，すなわち 10° と 18° とは内容上連関をもっと言わねばならない (10°＝18°)。

（ハ） 16° と 17° について。16° のタイトル≪他宗教の虚偽≫ Fausseté des autres religions は，これと対立するキリスト教，すなわち 17° の≪愛すべき宗教≫ Religion aimable を志向している。つまり，両章は≪アポロジー≫の構成の上から言って，否定的対立を媒介して相互に密接な関係にある。したがって，16°＝17° である。

（ニ） 18°≪宗教の基礎と反論への回答≫に属する La. 450-Br. 601 中には，≪異教は基礎を持たない。≫という言葉が見られる，そうしてパスカルはこの断章において，マホメット教とユダヤ教を批判し，キリスト教の≪神聖なる≫所以を述べている。したがってこの断章をふくむ 18° が，（ハ）においてわれ

われが出会った 16°≪他宗教の虚偽≫と繋りを持つことは，明らかである。ゆえに 16°＝18°。

（ホ） 16° と 13° について。（a）——Non classé の La. 376-Br. 279 は，次のごとく述べる，≪信仰は神よりの賜物である。われわれがそれを推理の賜物であると言っているなどとは思わないでほしい。他の諸宗教は，彼らの信仰についてそうは言わない。それらの宗教は，信仰に達するためにただ推理しか提供していないのであるが，それなのに，推理は信仰へ導いてくれないのである。≫この断章は，一読して明らかなように，≪信仰≫ foi と≪推理≫ raisonnement との関係を叙したものである。ところで 13° ≪理性の服従と利用≫のうちの La. 358-Br. 273 中には，次の叙述が存する——≪もしすべてを理性に従わせるならば，われわれの宗教には神秘的，超自然的なものが何もなくなるだろう。≫

さて≪信仰≫（La. 376）はそれ自身≪恩恵≫la grâce と≪奇跡≫les miracles にかかわり，かつこれらを対象とする。そうしてパスカルによれば，≪恩恵，奇跡。どちらも超自然的。≫（La. 470-Br. 805）である。したがって当然ながら，≪信仰≫は≪超自然的なる≫ surnaturel もの（La. 358）に係わる。他方，≪推理≫（La. 376）が≪理性≫（La. 358）の作用であることは言うまでもないから，両断章（La. 376 と La. 358）は宗教上内面的に一致している（パスカルの神学的立場から見て）。したがって La. 376（Non classé）と 13°（La. 358）とは，関連を持つ（La. 376＝13°）。

（b）——次に La. 376 は上掲のごとく，≪他の諸宗教≫ les autres religions について批判している。まさにこの点において，La. 376 は 16°≪他宗教の虚偽≫ Fausseté des autres religions と連関することは，明らかである。したがって La. 376＝16°。

（c）——以上（a），（b）により，13° と 16° は La. 376-Br. 279 を介して繋りをもつと言わねばならない。すなわち，13°＝16° が推定される。

（d）——13° の La. 365-Br. 838 には，≪成就した預言は一つの永続的な奇跡だからである。≫という一文があるが，これは 16° の La. 412-Br. 598 中の≪聖書はそれと同日の談ではない。そのなかにマホメットの漠然さと同様に

奇妙な漠然さがあることは，私も認める。だがそこにはすばらしい光があり，あからさまに成就した預言がある。≫という重要点において，共通性を有つ。すなわち，≪成就した預言≫ les prophéties accomplies についての叙述が見られることである。この≪成就した預言≫は，パスカルにとって，極めて重要なる概念である。なぜなら，彼は La. 469-Br. 588 において，≪われわれの宗教は賢くもあり，愚かでもある。賢いというのは，それが最も知恵に富み，奇跡，預言などの上に最もかたく立てられているからである。……la plus fondée en miracles, prophéties, etc.≫と述べられているからである。したがって，かかる重要概念の見出される両断章（La. 365 と La. 412）を夫々ふくむ両章は，決して無関係とは言えない。それゆえ 13° と 16° は，内容的連関をもつと言うべきである（13°＝16°）。

かくしてわれわれは，（c），（d）の結論に徴して，13°＝16° を確定しうるのである。

（へ） 9° と 17° について。9°≪哲学者たち≫中の La. 278-Br. 466 は，次のごとくである——≪エピクテトスは道を完全に悟ったとしても，人々にはこう言うだけだ。「君たちは道をまちがえている」と。彼は，ほかに道があることは示すが，そこに導いてはくれない。それは神が望まれることを望む道であり，イエス・キリストだけがそこへ導く。＜道，真理＞ゼノン自身の悪徳。≫

次に 17°≪愛すべき宗教≫の La. 42 3-Br. 774 には，≪すべての人のためのイエス・キリスト，一民族のためのモーセ。≫および≪イエス・キリストは，すべての人のために十字架の供え物をささげられた。≫の叙述が存する。9° の断章（La. 278）と 17° のそれ（La. 423）とを比較するとき，われわれは両者に重要なる共通性のあることに気づくであろう。つまり，≪イエス・キリストだけ≫ Jésus-Christ seul が万人を正しい道へ導きうること，言いかえれば万人を救いうること——こうしたキリスト教の根本思想が，両断章のうちに表現を異にしてではあるが，明瞭に読み取れるのである。この重要点の共道性こそは，両章（9° と 17°）の内面的関係を示すものである。したがってわれわれは，9°＝17° を認めねばならない。

（ト） 17° と 13° について。13°≪理性の服従と利用≫中の La. 363-Br. 747

bis は，≪「永続性」の項における二種の人々を見よ。≫という短断章であるが，これと連関をもつ断章が 17°≪愛すべき宗教≫中の La. 424-Br. 747 に見出される——≪肉的なユダヤ人と異教徒とは悲惨を持ち，キリスト者もそれを持っている。異教徒には，贖い主は存在しない。彼らはそんなものを望みもしないからだ。ユダヤ人にも，贖い主は存在しない。彼らはむなしくそれを望んでいる。贖い主はキリスト者のためにのみ存在する。(「永続性」を見よ)≫この両章にわれわれが関連性を認めるのは，第一に両者に≪「永続性」≫ Perpétuité なる語が見出されること，第二に La. 363 が≪二種の人々≫ les deux sortes d'hommes なるものに触れているからである。21°≪永続性≫中の La. 545-Br. 609 によれば，≪二種の人々≫とは，次のごとくである——≪それぞれの宗教における二種類の人々。異教徒の間では，動物の崇拝者と自然宗教内の唯一神の崇拝者。ユダヤ人のあいだでは内的な人々と古い律法内のキリスト者であった霊的な人々。キリスト者のあいだでは，新しい律法内のユダヤ人である粗雑な人々……≫したがって La. 363 (13°) の≪二種の人々≫なるものは，≪肉的ユダヤ人≫ les Juifs charnels・≪異教徒≫ les païens・≪キリスト者≫ les Chrétiens の宗教的意義ないし宗教的評価にかんするものであって，La. 424 (17°) 中に見られる人々にかんする叙述内容と基本的に通ずるものである。すなわち，両断章を夫々ふくむ両章は，その基本的性格において，関連をもつと言わざるをえないのである (13°＝17°)。

(チ) 18° と 13° について。(a)——18°≪宗教の基礎と反論への回答≫中の La. 451-Br. 228 は，≪無神論たちの反論≫ Objection des athées という語を載せている。(b)——ところで Non classé の La. 471-Br. 222 も≪無神論者≫Athées なる小見出しを持っている。(c)——18° の章は，このうちに≪無神論たちの反論≫を含むこと，および章名が≪宗教の基礎と反論への回答≫であることにより，この章 (18°) が無神論者への反論にかんするものであることは，明らかである。したがって，≪無神論者≫なる小見出しをもち内容的にも回答の性格を有つ La. 471 (Non classé) が，18° に所属することもまた明らかである。(d)——ところでこの La. 471 において，パスカルはキリストの復活やマリヤの処女懐胎を弁護している——≪無神論者。どんな理由で，彼らは，

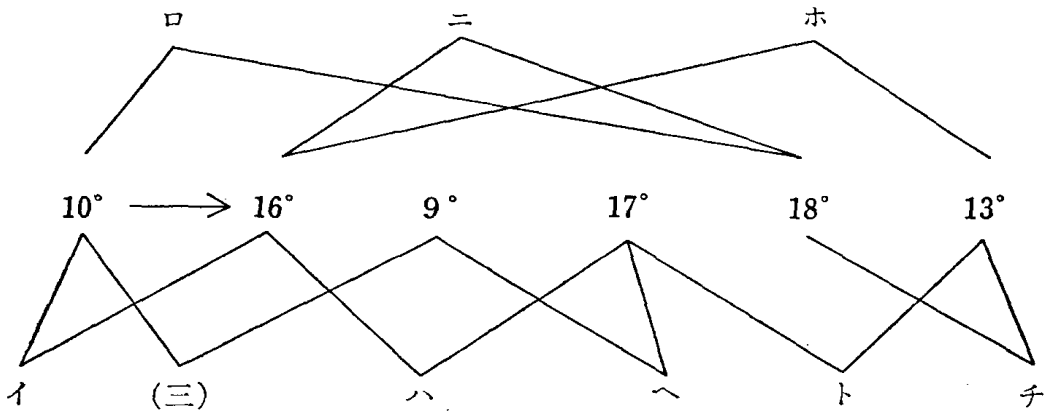
人は復活できないと言うのか。生まれることと，復活することと，かつてなかったものが存在することと，かつて存在したものが再び存在することと，どちらがいっそう困難なのか。存在しはじめることのほうが，再び存在することよりも困難なのかどうか。習慣が一方をわれわれにとって容易にし，習慣のないことが，他方を不可能にする。なんと通俗的な判断の仕方よ。なぜ処女には子を生めないのか。雌鶏は雄鶏なしでも卵をこしらえるではないか。何がその卵を外から他の卵と区別するのだろう。また雌鶏が雄鶏と同じようにそこに種子を作ることができないと，だれがわれわれに言ったのだろう。≫

（e）——さて 13° ≪理性の服従と利用≫中の諸断章は，≪奇跡≫ miracles (La.354-Br. 812, La. 365-Br. 838, La. 369-Br. 811) や≪聖餐≫l'Eucharistie (La. 353-Br. 224) やその他聖書に見られる理性によっては容易に信じられない≪超自然的なもの≫ les choses surnaturelles (La. 358-Br. 273, La. 373-Br. 267) を説き，かつ擁護している。そうしてこれは，その主旨において 18° に所属すべき La. 471 の内容となんら異るものではない。それゆえ 18° と 13° は，Non classé の La. 471 を介して密に連関していることが分る（18°＝13°）。

以上（三）および（四）の結論を表示すると，次のごとくである。

10°＝ 9°（三）	16°＝17°（四のハ）	9°＝17°（四のヘ）
10°→16°（四のイ）	16°＝18°（四のニ）	13°＝17°（四のト）
10°＝18°（四のロ）	16°＝13°（四のホ）	18°＝13°（四のチ）

この表を図示すると，次のごとき複雑な関係網を形成する。



図の解説を行うと，次のごとくである——一例を挙げると，図の右上のホより発する二つの線（ホ 16° とホ 13°）は，16° と 13° の両章が直接関連を有って

いること（16°＝13°）を示している。而してホはその関連の証明が本文中の（四）の（ホ）において行われていることを，示すものである（表の 16°＝13° を参照）。この関係図は直接関係のあるもののみを，線で表わしたのであるが，直接関連のない二個の章間の間接的関係をも，この図によって推定することが，可能である[4]。例えば 9° と 13° とは直接的関係は図示されていないが，9°＝17°（へ），17°＝13°（ト）により，17° を介して，9°＝13° が間接に導き出される。同様の手続を経れば，すべての章の各々の間の関係を，間接的ながら，証明しうるのである。したがってこの図は，すべてが例外なく連絡し合う一大関係網を構成していることが，分るのである。

ところで，われわれはこの関係図を観察する時，一つの重大なる事実に気附く。つまり，10° ≪至福≫と 9° ≪哲学者たち≫の二個の章が，叙上の如く各章が例外なく連絡しあうこの一大関係網のうちに，組み込まれていることである。この両章は，『第一写本』の順序においては，≪第一部≫に属するものであるが，われわれの関係図では，これらは≪第二部≫にぞくしている。この相違は極めて重要であって，注目に価する事柄である。

註

（1） この推論に対し，次の推論も当然可能である。すなわち，10° と 15° bis とは内容上密接な連関があり，10° は『第一写本』では≪第一部≫に属しているのであるから，15° bis こそ――われわれの結論とは逆に――≪第一部≫に所属するものであると。しかし，≪第一部≫に属する 15° bis は 15°≪人間を知ることから神への移行≫の末尾に綴られている事実に，われわれは留意せねばならない。なぜなら，15° の≪神への移行≫Transition……à Dieu は，14° の≪この神の証明方法のすぐれていること≫ Excellence de cette manière de prouver Dieu を予想するものであり，さらに後者は 23°≪イエス・キリストの証し≫Preuves de Jésus-Christ を当然予想するものであり，かつ 23° こそは前回（Ⅶ）において証明された如く，パスカルの≪アポロジー≫にかんする証拠中末尾に位置するものだからである。かように 15°・14°・23° の三者は，内容的に連関しており，かつ 23° は≪第二部≫中に置かれるべきキリスト教の証拠中に属するのであるから，15° は――≪gradation≫によって――必然的に≪第二部≫に属するものと言わねばならないのである。

（2） Louis Lafuma, Histoire des Pensées de Pascal, Éditions du Luxembourg, Paris, 1954, p. 85――86.

（3） 15° bis は 15° の末尾に綴られていたものであるが，これを 15° bis→15° と解すべきであるとする反論がありうるかも知れない。しかしわれわれの解する 15°→15° bis は常識的であり，他の諸リヤスの順序（『第一写本』の順序）と一致している。すなわち，『第一写本』では，12°≪Commencement≫→27°≪Conclusion≫の方向順序で筆写されており（この方向順序は内容上逆転されえない），そうして 15°→15° bis もこれと一致する順序方向で写されている。したがって，逆方向の 15° bis→15° は，不自然であると言わねばならない。

（4） われわれは「関係」を，直接的と間接的とに分ける。本文中で，「無関係である」とか「関連がない」または「連続的でない」等の表現の意味するものは，二者（または，それ以上の数のもの）の間に「いかなる関係もない」という意味ではなく，その関係は「間接的である」またはその関連が「稀薄である・密接でない」という意味に外ならない。実際上，パスカルが意図した≪アポロジー≫において，互いに全く無関係の章がありうるはずはない。したがって，各章間の関係の強度ないし濃度は，相対的程度的のものにすぎない。（註了）